

目覚め

乳白色の膜の中で、心地よいまどろみに浸っていた。淡い光の中を漂う意識が覚醒と睡眠の狭間を行き来する。羊水に包まれて眠る胎児のように、このような感覚なのだろうか。外界のいかなる憂いからも守られ、誰かに優しく抱きしめられているかのような安心感に満たされていた。ただひたすら心地よく、たゆたう意識の海でずっとこの時間が続けばいいのにと願っていた。

とろとろと夢の世界を漂う。何度か視界が晴れるように思考が明晰めいせきになったことがあったが、その度に無理やり目を閉じてしまった。まだ、起きたくない。ここにいたい。

そうして完璧な眠りの世界へと戻る。その度に己の中から何か大切なものがこぼれ落ちていくのが分かったが、気にしなかった。それよりもこの充足した時間がなによりも大切だ。この穏やかな時間が、永く永く続くことを心から願っていた。

しかしある時、そんな想いを裏切るように膜に裂け目が生まれた。気が付いたときにはすでに遅かった。全面に蜘蛛くもの巣のような細かな線が走り、今にも壊れそうだった。

なるべく衝撃を与えないようにと、息をひそめる。身じろぎもせず、息を殺すように体を丸める。けれど無駄だった。世界がぴしりと音を立てて割れる。なんとかしなければと焦るが、明確な打開策がすぐには見つからない。

そうしている間にもう一度、音を立てて世界が砕け散った。止めようと

伸ばした腕が虚しく空を切る。慣れ親しんだ乳白色よりもずっと眩^{まぶ}しいものが閉じた瞼^{まぶた}に感じる。光だ。外界の光だ。

どうやら自分は土の中にいたようだ。覆っていた殻のようなものが、硬質な音を立てて崩れていく。残されたのは自分だけ。ぽっかりと開いた穴の中でひとりいた。

上半身をゆっくりと起こす。まぶしさに目を細める。目覚めてしまったことを知った。

「――？」

誰かの名前を呼ぼうとしたが、その名前が思い出せなかった。そもそも自分は今、人の名前を呼ぼうとしていたのだろうか？ 目覚めたばかりのせいか、思考がまだ散漫だ。大切ななにかを失ってしまったような、そこはかとなく胸を締め付ける不安感がある。

しかしふわりと風が頬を優しく撫^なでるのを感じて、瞬^{しゅん}きをしているうちにそんな不安もいつしか消え去っていた。

序

日が沈む黄昏時。たそがれどき 仕事を終えた男たちが軒先で笑っていた。顔を赤くして、上品とは言いがたい声で、しかしその顔は目に痛いほど明るかった。苦労も不安も吹き飛ばして、明日を信じている笑顔だ。見ていられなくて、そっと視線をそらした。

懐が寂しいのも確かだが、たとえあっても自分はあるふうには笑えないだろう。あんなふうには未来を信じられない。

いや、もしかしたら数ヶ月前ならば違ったかもしれない。同じ境遇の友が自分の隣にいれば。そうすれば、暗雲の立ち込める未来であっても、笑っていたかもしれない。

しかし今、自分の隣には誰もいない。これから、だれかがやって来るともないだろう。

普通の人間だったならば、と思うことは何度でもある。けれどいくら嘆いたところで自分は自分でしかなく、変わることはできない。

そつと右胸を押さえた。服の下には、友が消えてから一回りは大きくなった痣がある。^{あざ}友は自分も必要なくせに薬を置いていったから、その分は抑え込むことができているが、そう長くは保たないだろう。それに次の薬を得るあてはない。ツテは消えた。一から探し出せたとしても、金を払えない。たとえ剣や防具——生きるための道具を売ったとしても賄えない。

自然と肩が丸まった。足取りが重くなる。

いくら抗ったところで、歩みの先に待っているのは絶望しかない。惰性のように仕事を続けているけれど、これだって意味がない。

自分の腕を見た。筋肉が盛り上がり、引き締まった腕はそこの男よりもずっとたくましい。体のあちこちに残る傷は、戦闘の名残だ。若手の中ではそれなりに期待される地位にいる。恵まれた体軀たいく、誰よりも力強い太刀筋。五年や十年もすれば、ギルドの幹部にもなれたかもしれない。しかし――。

皮肉げに口元を歪ゆがめた。

それは淡い幻想だ。その人並み外れた力の代わりに、狂って死ぬ。

そんな未来になるのなら、こんな才能はいらなかった。力が弱く、剣も持ち上げられない貧弱さだとしても、普通に生まれたかった。……そんなこと、いくら嘆いても意味はないが。

ゆるゆると頭かぶりを振る。自分の病気を知って物心ついた頃からずっと、考え続けていたことだ。それでも奇跡など起こるはずもなく、この歳まで生

きてきた。

ふと隣を見て眉を下げる。共に育ってきた兄弟とも呼べる友の姿はもう、ない。

自分はおそらく、この町で朽ちる。だが薬を見つけるのだと言って出て行った友の元には、どうか奇跡が起きてほしい。たとえその確率がどれほど少ないものだとしても。そう願わずにはいられなかった。

重い足を引きずって歩く。近い内に自分が終わってしまうだろうと分かっている、それでも普通に過ごそうとする自分に、苦笑が浮かぶ。どれほどの金が稼げたとしても、もうどうにもならないだろうに。それでも足を止められないのは、起こりもしないだろう奇跡を砂粒ほどでも信じているのか、それともただの惰性か。

一瞬考えて、口元を歪めた。

どちらだっていい。その答えが出たとしても、どうせ未来は変わらないのだ。

……もう、なにも考えたくなかった。

すべてののはじまり

目を瞬く。目を擦ってみても、見えるものは変わらない。木だ。木々^{きぎ}だ。森だ。

——ここはどこだ。

目覚めたら見知らぬ場所にいた。長い夢を見ていた気がする。心地よい眠りの中にいた。そこから起きたら、ここだ。

無意識のうちに首を傾げる。と、視界に黒が見えた。髪だ。しゃがみ込んでいるから正確なところは分からないけれど、腰ほどまでありそうな髪。引いてみると、痛い。間違いなく自分のものだ。

おかしい、こんなに長くはなかったはずなのに、と思って、すぐにそう

考えた自分に首を捻った。

どうしてそう思ったのだろう。目覚める以前の記憶がぼつかりと欠落している。しかし赤子のように何も知らないと言うわけではなく、常識や習慣など人として己を形作る知識は残っていた。ただ、この森で目覚める以前に、いったい自分はなにをしていたのかという記憶が霧がかかったように朧おぼろけ気だ。着ている服を漁るも、自分を指し示すような何かは見つからなかった。

しばし呆然ぼうぜんとしていたのだと思う。遠くで名も知らぬ鳥が鳴いて、我に返った。

息を吸って、吐く。

どれほど脳みそを絞ってみても、なにも思い出せそうにない。

ここがどこで、なぜ自分はここにいて、そして、そもそも自分は何者な

のか。

しかしこうして呆然としていても仕方がない。ならば今出来ることは、現状確認だ。この森を見て回ろう。

そう考えて、一步踏み出した。

さくさくと地を踏む。足を包む靴は森を歩くのに適しているとは言いが、履き馴染なじんでいるのか歩きやすかった。

しばらく歩いて水の匂いを感じた。ごくりとつばを飲み込む。喉の渇きに気が付く。

耳を澄ませる。ささやかだが水が流れる音がする。音を辿たどると突然視界が開けた。

湖がある。それほど大きなものではないが、十分に広い。

両手で水をすくい上げ、口に近づけたところで一瞬躊躇する。飲んで大丈夫だろうか。しかし逡巡はそう長く続かなかった。水中で魚が優美に泳いでいるのを見つける。覚悟を決めて、口を付けた。おそらく、問題ない。問題があったとしても、もう我慢が出来ない。いちおう、含んだ水を口の中で転がす。が、妙な感覚はしなかった。待ちきれずに飲み込む。清涼な水が喉を通る。

その後、何度か水をすくい上げて満足行くまで喉を潤した。

一息付いて、やっと周りに意識が行った。風があまりないせいとか、対岸の風景が水面に映り込んでいる。もしやと真下の水面を見た。が、苦笑する。

もしかしたら自分の顔を見えるのではないかと思ったのだ。しかし、水面は僅かながらも波立っていてちらりとも見えなかった。

（鏡のようになったらいいのに）

そう思った瞬間だった。

「えっ」

水面は音もなく凍り付いた。いや、凍り付いたように見えた。こわごと水面を触ると冷たさを感じる。しかしあくまで清水の冷たさだ。氷とは違う。

周りの水面は滑らかに均され、青い空を映していた。そう、まるで鏡のように。当然、自分の顔も映る。

（そうか、こんな顔だったか……）

鏡のような水面に映るのは、妙に親しみを感じる男の顔だった。肩までもある黒髪に、同じ色の目。細かな年齢は推し量れないが、二十は越えているだろう。

この際だと己の体確かめた。

服を捲まくりあげて体を見る。はたから見ると完全に不審者だが、今は自分以外いなので問題ない。

（けっこう筋肉が付いてるな）

腹筋がきれいに割れている。体のどこにも過分なものがなく、しなやかな獣のように均整の取れた形をしている。そして右胸の下に妙な形の薄い痣あざがあった。

（これは花、か？）

いくつかの花弁のような痣が集まっていて、それがまるで花のように見える。色が抜けたような白い痣なのでそれほど目立たないが、一度気づくと目を引かれた。指の腹でさすってみる。一体これはなんだろうか。

他になにかな変なところはないだろうか、見える範囲で一通り確かめて

みた。結果、その痣以外に目立った点はなかった。

顔を見て、体を見れば、記憶がわずかでも戻るのではと思ったのだが、そんな簡単なものではないらしい。ちらりとも思い出す気配はなかった。

しばし頭を悩ませて。

（分かん……）

いくら頭の中を洗っても、あの殻から出た以前の記憶が出てこない。ふわふわと霞かすみのような残滓ざんしはあるのだが、肝心な形を取る前に霧散してしまう。

（……ひとまず）

小さく息を吐いた。ゆっくりと首を振る。ひとまず置いておくしかないのだろう。今悩んでも進展する気はない。そして、それより先に必要なことは、現状の把握だ。今まで分かったことをまとめると――。

自分はどうかやら記憶喪失で、ここは森の中で、そして変な力が使えるよううだと言うことだ。それ以外はまったく分からない。

まずは人に会うなりして、ここがどこなのか知りたい。実は自分は近所の村人かなにかで、不測の事態があつて記憶をなくした、なんてことがあるかもしれない。意外とあっさり記憶が戻ったりして。自分を励ますために、なんとかポジティブに考えてみる。

とりあえず森の出口を目指そうと歩を進める。どこに向かって進めば良いのかは皆目検討もつかないが、一旦は太陽の方向へ進むことにする。時間と共に方角は変わるだろうか、前に進んでいることには変わりがない。願わくは、餓死する前に人のいる場所へ行きたいものだ。

歩き続けた先で、開けた場所に出た。森の切れ目かと一瞬喜んだが、し

かしどうやら違うようだった。頭上を照らしていた太陽は随分と傾いている。もしや森の中で一晚過ぎねばならないのかと思っていたが、なんとなく開けた場所の方が安全な気がする。獣の姿こそ見なかったが、歩いている内に気配だけは感じていた。足は棒のように重い。慣れぬ森を歩いたせいだろう。気づかぬうちに早足になる。

だがそれも数歩進むと止まった。足が沈む。足元を見て、小さく息を吐いた。

どうやらここは沼地のようだ。草原だと思っていたが、よくよく見れば茂る草の種類が違うような気がする。まだ足を踏み入れたばかりだから多少足が沈む程度で済んでいるが、この先に進んでそれだけで済むとは限らない。奥の方にひよろひよろと長い草が生えているが、よくよく目を凝らしてみればその下には水が溜^たまっているようだった。仕方がない、引き換

えして別の道を行こう。

「っ！」

が、なにかに躓つまずいた。とっさにバランスを取って倒れることは防いだ。足元を見る。

そこにあったものに、眉をしかめた。

「……なんなんだ？」

足に絡みついていたのはヌメヌメと光る触手だった。呆ほうけている一瞬のうちに、茂みの奥から別の触手が姿を現す。伸びてきたそれに、顔を引きつらせる。慌てて足に絡みつく触手をもう一方の足で蹴り飛ばした。一度では離れず、二度、三度と蹴ってやっと離れる。

素早く立ち上がって構える。そうしているうちにその奇妙な生物の全容が明らかになった。

それは、巨大なイソギンチャクのようなだった。触手を蠢^{うごめ}かせて獲物を狙っている。体の中心あたりに水色に輝く石のようなものが浮いていた。魔獣とでも呼ぶべき異形だ。だがスピードはそれほど早くないのか、触手の大本——胴体は這^はうようにしか地面を進めないようだった。

このまま走って逃げようと考えて、しかしふと気配を感じた。振り返って。

「おいおいおいおい」

口元が痙攣^{けいれん}した。

同じような異形が、後ろに構えるようにしている。挟み撃ちされている。思わず足を引いて、コッソンと何かが当たった。下を見る。白く長い棒状のもの。ちょうど自分の肘の先程度のそれは——。

(骨……)

動物の骨だった。あいにくどのような動物かは判別できないが、大きさから見て人間ほどの体躯たいくはあるようだった。

背筋に冷たいものが流れる。どうやら気づかぬ内に魔獣の喰くい場に足を踏み入れていたらしい。逃げようにも、もう四方が囲まれていた。走って逃げるといのは難しそうだ。

しかし、だからといって素直に食べられてやるつもりはない。落ちていた大振りな枝を拾い上げて構えた。

しなるように飛んできた触手を弾き落とす。体は意外なほど素直に動いた。もしかしたら自分はいった戦いをしたことがあったのかもしれない。考えるよりも先に、体が動く。

だがそれも長くは続かなかった。多勢に無勢、受けそこなった攻撃が、握っていた棒を弾き飛ばした。

棒がくると弧を描いて飛んだ先は、手が届かないほど遠く。触手の攻撃を避けながら、唇を噛んだ。

どうする。どうすればいい。

（せめてなにかあれば……）

周囲に目を走らせるものの、他に武器にできそうなものがない。

ついに避けきれずに攻撃が肩に当たった。地面に倒れる。湿気を含んだ地面が衝撃を押し殺したものの、代わりに機動を奪う。立ち上げるよりも次の攻撃が届くほうが早い。思わず手を前にかざした。

そして。

——ゴウツ！

陣のようなものと共に、なにか熱いものが手から飛び出した。巨大イソギンチャクが怯んだように後退した。

「……………は？」

見間違いでなければ、今、己の手から火が出なかっただろうか？

思わずまじまじと手のひらを見つめた。だが火傷も焦げもなく、ただ土に汚れた手がある。

しかし、そう長い間呆けていられなかった。我に返ったイソギンチャクがまた触手を伸ばしてきたからだ。仰け反るようにして回避する。そして右手を突き出した。

（たしか、こんな感じだった……）

少し前の感覚を手繰り寄せる。

心臓あたりが熱くなり、その熱は腕を通して右手へと移動する。そして魔法陣のようなものが空中に描かれ――。

――ゴウツ!!

先程よりも大きな炎が飛び出した。避けるのが間に合わなかったのか、イソギンチャクは炎に飲まれる。形容しがたいヒビ割れた悲鳴を上げて、一回りも二回りも小さく縮んだ。そしてブスブスと煙を出して沈黙する。どうやら無事に倒せたらしい。

気づけば周りを囲んでいた他のイソギンチャクたちは消えていた。

ほっと息を吐く。そして改めて己の手を見つめた。

（火が、出た）

幻でも見間違いでもない。馬鹿な、と言いたくなる。だが、頭の奥底で“そんなの、当たり前だ”とも思っていた。記憶にない過去の己にとって、もしかしたらこれを“当たり前”だったのかもしれない。

しばらく物思いにふけたが、周囲が暗くなってきていることに気付いてはっと顔を上げた。ここで時間を浪費している暇はない。少なくとも日

が完全に沈む前に安全な場所を探さねばならない。たまたまはじめて異形を見たが、普通に考えれば森にも似たようなものがある可能性はある。むしろ今まで出会わなかったのが幸運と言えるだろう。自分は多少対応するすべを持っているからといって、安全とは限らない。寝込みを襲われればひとたまりもないだろう。

できることならば人に会いたい、森の出口までどれほどかかるかわからない。なんとなくこの沼地の奥に行くべきなのではという気がしているが、さすがにさっきの今でここを突っ切る気持ちは湧かなかった。森へ引き返そうと踵^{きびす}を返す。

しかし。

「

何かか聞こえた。ぴたりと足を止めて耳を澄ます。

「——や、——ろ」

確かに聞こえた。かすかだが、人の声だ。じつと声の方向を定め、走り出した。どうやら沼地の縁らしい。直線で進めば早いだろうが、沼は足が沈む。それよりも外縁を回っていたほうが確実だった。

生い茂る低い木々が邪魔だ。体に引っかけ傷が付いていく。前に進むほどに声が大きくなっていく。そして、ついに見つけた。

「えっ……」

しかし予想もしていなかった姿に声を失う。勢いをつけた体を無理矢理に抑え込んで、その場に立ち止まる。

声の主の男を襲っているのは、さきほど相まみえた巨大なイソギンチャクだ。しかし自分のときと違って、男は半ば飲み込まれている。

イソギンチャクはうねうねと表面を波立たせ、溶かされたのかほとんど

意味をなしていない服から覗く肌^{のぞ}に触手を伸ばしている。スライムに押し倒されている男は屈辱に顔を赤くして、しかし逃げる力は残っていないのか奥歯を噛み締めて耐えている。

イソギンチャクがいきなり現れたこちらの存在に驚いたのか、大きく体を揺らした。その拍子に男の下半身が見えた。

触手は足に巻き付き、そして男の急所——股間にも這わせていた。そして、そこは明らかに怒張している。

男は襲われていた。それも、どうやら、性的に。

予想だにしない光景に、一瞬頭の中が真っ白になった。

「っ……」

立ちすくんでいると、こちらに気づいた男と視線が合う。

声が聞こえた、気がした。意志の強そうな眉が力なく垂れ下がり、薄く

涙の膜のはった瞳が懇願するようにこちらを見ていた。

ぐっとつばを飲み込む。炎を、と思ってすぐに打ち消す。あれは火力がかなり高かった。そのまま打ち出せば、イソギンチャクはどうかはできるだろうが、男も無事ではすまない。ならば……。

かざした手に、あの時とは異なる魔法陣が現れる。

「――水」

魔法陣は陽の光を反射して輝く水面のような光を滲ませた。そして、次の瞬間、勢いよく鉄槌てつづいのような水球が飛んだ。

逃げる間もなく直撃を受けたイソギンチャクが、水球の形にえぐられる。数秒その形のまま停止したかと思うと、ばしやりと音を立てて粘度を失って解けた。

イソギンチャクを倒せたらしい。奴の中心に浮いていたものが、もしや

核だったのだろうか。

慌てて男に駆け寄る。彼はぐったりと地面に倒れ伏していた。もしや、さっきの攻撃がどこか当たってしまったのか。威力の調整などできなかったから、助けるつもりでもしや命を奪ってしまったのでは。

混乱のままぺたぺたと男の体を触ると、「んっ……」と小さな声が聞こえた。どうやら気絶しているだけのようだ。良かった。次からはもっと慎重に行動しようと心に刻みながら、ほっと息をついた。

人に会えたのは良かった。その人間が襲われていたのは驚きだが。しかし、まあ、助けられて良かった。

（だが……）

これはどうすればいいのか。森の中でイソギンチャクの体液に濡れるロボロボの男の前で少しばかり遠い目をした。

仮定第一村人

体の調子が最善とは程遠いことを、レオンは自覚していた。だが、仕事は待ってくれない。次の薬を買わねば、生きていけない。金があったとしても、レオンに売ってくれるような者の当てもなにもなかったが、それでも簡単に諦めることはできなかった。体調と相談しながら、普段ならば問題ない難易度の仕事を受注した。

しかし、油断していたのだろう。

受注した分の灰色はいろおおかみ狼を倒し、討伐の証として切り落とした尻尾を道具袋に入れたところまでは良かった。あとは帰るだけだと気を抜いてしまったのが間違いだった。気づいた時には、沼地に足を踏み入れていた。

そこは沼イソギンチャクの住処だ。気づいてすぐさま踵^{きびす}を返したが、足に絡みつかれ、引っ張られた。そこで触手を切り落とすことができればよかったのだが。

運が悪いことに、その瞬間に目眩^{めまい}に襲われた。ずんと頭の芯が重くなった。一瞬の硬直。舌打ちをして、すぐに剣を振るう。しかし歪^{ゆが}んだ視界の先で、振るった件は沼イソギンチャクの核を外し突き抜けたのが見えた。沼イソギンチャクは切り裂かれた断面を数秒揺らした後に、怒ったように叫び声を上げた。

もう一度、と思った時にはもう遅かった。触手が鎧^{よろい}の隙間から入り込み、肌に直接触れた。ちくりとなにかが刺さったのを感じてすぐに、がくりと力が抜けた。麻痺^{まひ}性の毒だ。本調子ではなかったこともマイナスに働いた。レオンはあつという間に動けなくなった。

沼イソギンチャクは脆弱ぜいじやくに見えるが、魔法抵抗も物理抵抗もあるため危

険度が高い魔獣だ。生息地は水気の多い沼地。生息地は世界的に数えるほどだというが、数が少ないわけではない。ただ彼らが生きられる環境がごく限定的なだけだ。生息できる土地では、むしろよく繁殖する。そのため、間違えて棲すみ家みかに足を踏み入れれば、あっという間に囲まれることになる。

しかし普通ならば、沼地の奥に暮らしていてここまで浅い場所に出ないはずなのだが。……そういえば、最近は魔獣の出現場所が変わっていると噂うわさに聞いた。近頃は本来ならばないはずの場所に高レベルの魔獣が出現すると。もしや沼イソギンチャクもそうなのか。

沼イソギンチャクを倒すには、最奥にある核を破壊しなければならぬ。体調が万全であつたならば鋭い突きでそれも可能だっただろう。しかし今のレオンには難しかった。結果、抵抗できないように毒を流し込まれ、

泥^ぬ凜^{かる}んだ地面に伏している。

沼イソギンチャクはまずレオンの鎧を器用に外すと服を溶かし始めた。露出した肌に触れると別種の毒を流し込み始める。

「――！」

媚^び薬^{やく}だ。レオンは声にならない悲鳴を上げた。

沼イソギンチャクに捕らえられた場合、体を溶かされ捕食されるのが通常だ。しかし例外がある。繁殖期だ。子を作るための期間に沼イソギンチャクに捕らえられると、子を生むための器として使われる。獲物を発情させ、そこから発生する特殊な魔力を食べて獲物の腹に子供を生む。その部分のメカニズムの詳細をレオンは知らなかったが、ただ陵辱の限りを尽くされることだけは理解していた。

麻痺し動くことの出来ない獲物は数日間その腹の中で沼イソギンチャク

の子供を育てる。そうした獲物は、彼らの子供の誕生と同時に腹を割られて死ぬのだ。最後に死体は子供たちの養分になる。

悲惨だった。そしてそれが近い将来にレオンに訪れる未来だった。

本来ならば、沼イソギンチャクは複数が組んで対処に当たる。奴らは凶悪であるが、動き自体はさほど早くないために、ひとりが捕まっても、他の者が救出に動けるからだ。そして、レオンのようにソロの場合は、そもそも生息地に近づかないことが定石だった。

過去に戻りたいと望んでも、体がピクリとも動かない。地面を掻くことすら出来なかった。そうしている間にも沼イソギンチャクの触手がレオンの肌を撫でる。反射的に肌が泡立った。媚薬が効いてなんでもない刺激でもひどく感じてしまう。露出させられた腹は肌の色を誤魔化すように白色粘土が塗りたいくらわれている。傷や痣を隠すための化粧に使われるものだ。

沼イソギンチャクが色粘土を擦り、その下から錆びさびのような黒い痣しずが覗く。この特徴的な痣を見る者が居たならば、その異様に深く眉をひそめただろう。しかしここには、レオンと沼イソギンチャク、被食者と捕食者しかない。

なにかを確かめるように触手がうねり、そろそろと体に巻き付いていく。と、一本がレオンの胸の突起に触った。

「んっ——！」

意思に反してびくびくと体が震える。触手は気を良くしたのか、突起を捏にねて擦って引っ張った。刺激を受けるたびに強制的な快樂が体を駆け、レオンの中心に熱を貯める。

触手は突起をいじりながら、レオンのそれに巻き付いた。そのまま、しごくように上下に動く。

「あっあっ！ あ、はあ、あっ！」

その直接的な刺激に剛直が勝手に固くなっていく。チカチカと視界が瞬く。もうイッてしまう——と思った瞬間にまた異なる触手が別の場所に触れた。

「そ、そこはっ——！ や、やめ……っ！」

こしょこしょとくすぐられているのはレオンの尻穴だ。まるでノックをするように触手が小刻みに触れてくる。擦くすぐったい感覚があるが、なによりもそこを暴かれるということは、己の腹に沼イソギンチャクの子供を産み付けられるということだった。レオンは真っ青になった。

逃げるために暴れようとするが、麻痺のせいで体を起こしただけで、逃げることは叶かなわない。

——こんなところで終わるのか。

走馬灯のように、己の半生が蘇^{よみがえ}る。

大したことの無い人生だった。

普通よりもずっと不幸なそれだった。

同年代と比べて恵まれた体^{たい}躯^{いく}は持つてはいたが、その代わりのように日陰に生きる定め——黒い痣^{しず}があった。いいや、この痣^{しず}の存在ゆえに、恵^け体^{たい}を得たのだろう。だが利点と欠点の天秤^{てんびん}は後者に大きく傾いていた。それがあるだけで、ただ生きることすら難しくなる。ひとりだけで生きることができない。仮に生きられたとしても、自由を保証されない。それでも、レオンは誰に首輪をつけられることなく、がむしゃらに走ってきた。

長く生きられないだろうことは分かっていた。そうであっても、諦められなかった。このまま明日が何度も続くことを。夜の後に朝があることを。そんなことはない、と、理解していたのに。

（こんなことなら、あいつに着いていくのだった……！）

ぎゅうとまぶたを閉じる。こんな屈辱の終わりを迎えるならば、いつそまだ口が動くうちに舌を噛み切ってしまおうか。そう、半ば覚悟を決めたときだった。

ひゅう、と風が吹いた。そして目の前に、人が現れた。涙に滲んだ視界でその輪郭を見る。

その人物はレオンを見ると驚いたように足を止めた。ぼやけた視界が邪魔で何度も瞬きをする。その人の目を見た。不鮮明な中でも、ぼちりと視線が合ったのが分かった。もう声も出ない喉を震わせて叫んだ。ごぼりと水の泡が沼イソギンチャクの中で弾ける。それだけ。絶望に目を曇らせたその次の瞬間、とんでもなく素早いなが、レオンの頭上を通り過ぎた。くらりと頭が揺れる。どうやっても振りほどけなかった戒めがはずれる。

体が宙に浮いた。

そして、がつんと音を立てて地面に頭を打ち付けた。そこで、レオンの記憶は途切れた。

気づくと、レオンは木陰に横になっていた。近くではちぱちと薪の弾ける音がする。ゆっくりと目を開けると、茜色^{あかね}に変わりゆく空が見えた。しばしぼんやりとして、次第に明晰^{めいせき}になっていく頭で何があったのか思い出す。

そうだ、俺は沼イソギンチャクに捕らえられていたはず——！

勢いよく体を跳ね上げると、「おっと」と驚いたような声がそばから聞こえた。あの気を失う直前に見た人物だろうか、レオンは視線を巡らせて、そして一瞬息を止めた。

レオンを心配げに見つめていたのは、精悍せいかんな顔つきの男だった。腰ほどまで伸ばされた髪は黒く、体はほどよく引き締まっている。容姿は整っていると言っていていいだろう。夜の酒場にも行けば、すぐにでも声がかかりそうだ。

しかし、なによりレオンの目を引いたのは、その瞳だった。髪と同じ色のそれは、不思議な輝きがあった。思わず目が惹ひきつけられるような……。伸ばされた手で優しく額に触れられるまで、レオンは何の言葉も発することが出来なかった。

「ああ、熱はないみたいだな」

紡がれる声は低く柔らかなテノールで、レオンは僅かな間、聞き惚ほれていた。

「おい、大丈夫か？」

二、三度目の前で手を振られ、はっと正気を取り戻す。

「あ、ああっ」

こくこくと壊れたからくりのように首を振る。相手はそれを心配げに見つめ、レオンの上から下まで眺めた後、それならいい、と口端だけ釣り上げて笑った。それになぜか心臓を殴られたような気がした。ぐっと息を詰める。相手はそんなレオンの様子に気づかないようで、こうなった経緯を話し始めた。

どうやらレオンはこの人物に助けられたらしい。沼イソギンチャクを倒したのはいいが、レオンは体液濡れで気を失った。放っておくわけにもいかず、ざっと全身を洗った後、起きるまで待っていたと。溶かされて服の役割を果たしていなかった布は脱がせてくれたらしい。悪いが荷物を漁らせてもらった、と言って彼は済まなそうにレオンを見た。今レオンが身に

まどつている毛布はレオンの道具袋から取り出したようだ。そこでようやく頭が動き始めた。

さっと冷水を浴びせられたかのように体温が下がる。自分のものではないように激しく打っていた心臓も凍りついた。口端が緊張で痙攣する。

この男はレオンの全身を見たのだ。ならば腹の痣も目に入っただろうか。不安を誤魔化すように、ぎゅうと握りこぶしに力を入れる。怯えられぬのならまだいい、侮蔑の目で見られるのも耐えられる。だが声高に己の痣を言いふらされたならば、あの町で生きていくことができなくなる。逃げなければならなくなる。背筋に氷を当てられたようだった。

男からは見えない位置で、そろりと毛布の中を覗き込む。染色は剥げかけているが、洗い流されたわけではないようだった。

ちらりと男を見る。レオンの視線を不思議そうに見返す顔を見て、細く

息を吐いた。土などで汚れていたし、男の反応を見ると気づかれなかった可能性が高い。

男はレオンが黙っているのを怒りのためとでも思ったのか、慌てはじめた。もしや下手なことをしてしまったのではないかと、こちらを気にかける様子に、レオンはゆるゆると息をつく。問題はなさそうだ。

今は疑心暗鬼になるよりも先に果たすべきことがある。こちらを心配そうに伺う男にレオンはゆっくりと首を振った。

「もちろん構わない、むしろ色々いろいろと手間をかけさせてすまない。助けてくれて、ありがとう」

そう言って、レオンは深々ふかふかと頭を下げた。それに男は少しだけ面食らったような顔をしたが、頬を緩めて笑った。

「いや、助けられて良かったよ」

その笑顔に、なぜかまた心臓が音を立てて、レオンは内心首をひねるところになった。



助けた男の名はレオンと言うらしい。

濃い灰色の髪に、氷のような青の瞳。冬の空を思い起こす色。短く刈り込んだ髪。丸洗する時に不可抗力で見た体は、引き締まっていた所々に傷があった。剣士と言われて、なんとなくしっくり来た。獅子を人の形にしたような人間だった。起きた始めこそ慌てたものの、落ち着きを取り戻した後は話しやすく真面目な雰囲気伺えた。

日が暮れる前に街に帰ったほうが良いということで、即席キャンプは

早々に片付けて出ることになった。実は森で迷ったのだと言うと、レオンは快く同行を許してくれた。まあ、許されなくとも付いて行くつもりではあったが。

まだ体の痺れが残っているようで、レオンはぎこちなく歩いている。彼を支えられる位置取りをしながら、色々と情報を訊く。

ちなみに、レオンは道具袋から取り出した真新しい服を着ている。

一度レオンが気絶している時に探した際に彼が身につけているもの——
といっても服はほとんどボロ布で、巨大イソギンチャクのせいだか鎧も腐食したようになっていたが——を採ったのだが、両手ほどの大きさの道具袋しか見つからなかった。さすがにそこには入っていないだろうと手を出さなかったのだが、どうやら見た目以上にものを詰め込めるようになっていたらしい。持ってみると結構な重量があったので、重さはそのまま物を

圧縮して入れられる魔法具だろうか。色々聞いてみたかったのだが、どこまでこの男に話していいのか分からずに訊ねることが出来なかった。

そもそも己にはこの世界の常識がない。おそらく魔法具マジツだろうというの
は分かるが、そういったものが一般的なのかも知らなかった。もしもそう
だったとしたら、どうしてそんな常識も知らないのだと聞かれるだろう。
そして俺はそれにまともに答えられない。まさか彼もこちらが記憶喪失だ
とは思わないだろう。

仮に記憶喪失だと話したとして、いきなり襲われることはないだろうが、
騙だまされる可能性もないわけではない。

そして、もしも自分がレオンだったらと考えてみる。たまたま出会った
人間に、実は記憶喪失なんだ、と告白されたらどうか。どう反応すればい
いのか悩むと思う。記憶喪失をぽんと治せるような術があれば良いが、そ

う都合よくいくかどうか。いずれはだれかに聞いてみなければならぬと思うが、もう少し状況が落ち着いてからにしたい。そこまで考えて、己の手探り加減にすこし呆れる^{あき}。苦笑を漏らすと、レオンがちらりとこちらを見た。なんでもないと手を振った。

レオンの話によると、どうやら日が沈む前には帰れる程度の場所に街があるという。彼は冒険者をしているらしい。

——冒険者。

あまり聞き慣れない言葉だ。

冒険をする者？　いったいどこを冒険するというのだ。あの森を？　確かに巨大イソギンチャク——沼イソギンチャクと呼ばれているらしい——はファンタジックな魔獣のようにも思えるが、あれを冒険と言っているのか。そして彼の装備から見て、どちらかというと剣士だと言われたほう

が納得できる。

流暢りゅうちょうとは言わないまでも、それなりに気まずくない会話を続けていたときだった。レオンが大切なことを聞いていなかったと声を上げた。

「そういえばあなたの名前を聞いていなかったな。なんて呼べばいい？」

そう言われて、そういえば自分の名前を名乗っていなかったことに気づいた。逡巡しゆんじゆんしたのは一瞬だった。

「——ジン、と呼んでくれ」

記憶がない。過去がない。ただ名前だけは、そう呼ばれていたことを今、思い出した。

じわり、と胸が熱くなる。

そうだ、俺の名前は“ジン”だった。